《モネの池に夕の雲映る》 六曲一隻屏風(部分) 2013年

ジャポニスムの源流を訪ねて

ジヴェルニー印象派美術館で平松礼二展ふたたび

2013年フランスのジヴェルニー印象派美術館、
翌14年ベルリン国立アジア美術館での個展を成功裡に終了。
以来、国際舞台で活躍する数少ない日本人画家として脚光を集める平松礼二さん。
その個展が、現在、ジヴェルニー印象派美術館で開催中だ。
5年ぶり2度目となる今回は、日仏友好160周年記念の一環でもあり、
6月半ば双方の政府関係者、来賓を集めた祝賀会、講演会が盛大に行われた。
ここでは華やかな式典当日の模様をはじめ、
画家と同館学芸員による特別対談の一部始終を収録。
巨匠モネ《睡蓮》との出会いにはじまり、平松芸術の代名詞ともなった
“ジャポニスム・シリーズ”の魅力、国際的評価の高まりなどを見つめる。

1809_hiramatsu3.indd 80-81 2018/08/06 13:14

ジャポニスム-印象派展および平松礼二展を開催中のジヴェルニー印象派美術館

平松礼二 in ジヴェルニー

国際画家へのさらなる布石

〈編集部〉

2018年6月15日に行われた式典に臨む平松礼二氏

日本画家・平松礼二さんのジヴェルニー印象派美術館での2度目となる個展が現在開催されている。前回（2013年）および翌年のベルリンでの展覧会の模様はその都度本誌で詳報。とりわけ両展が現存の日本人画家を取り上げた企画展（美術館主催）であること、またジヴェルニーでは出品作すべてが美術館買上げとなるなど、異例づくしの内容が特記事項ともなった。それから5年、巨匠モネとの出会いにはじまった平松さんのライフワーク〝ジャポニスム・シリーズ〟は、果たしていま現地でどのように受け止められ、評価されているのだろう。6月15日、記念式典および講演会が行われたジヴェルニー印象派美術館を訪れ、リアルな反応を探った。

円窓の作品《緑陰》が設置された平松礼二inジヴェルニー会場入口［上］と
大作屏風が並ぶ場内。課外授業の生徒たちは初めての日本画体験に興味津々

巨匠を魅了したジャポニスムとの対比

日仏友好160周年という節目を迎える今年は、両国が国をあげて支援する記念事業が双方で開催されている。フランスでは今夏7月から〈ジャポニスム2018：響きあう魂〉というコンセプトのもと、パリを中心に様々なアートイベントがスタート。

ゴッホやモネなど印象派の巨匠たちを魅了し一大ムーブメントともなった〝ジャポニスム〟の意義を見直すことで、2国間の文化交流のさらなる発展を促そうというものだ。そして今回、ジヴェルニー印象派美術館での〈ジャポニスム――印象派〉展（7月15日まで）と同時開催となった〈平松礼二 in ジヴェルニー〉（11月4日まで）もその一環として重要視されている。

何より取材当日の祝賀会場に、木寺昌人（在仏日本大使館・特命全権大使）、セバスチャン・レコルヌ（フランス国務長官・大臣）、ティエリー・クデール（ウール県知事）といった政府関係各氏が列席したこと。また、後日、フランスのマクロン大統領、日本から安倍首相代理として河野太

1809_hiramatsu3.indd 82-83 2018/08/06 13:14

［上］祝賀会に参列した主賓。左より在仏日本大使館・特命全権大使 木寺昌人夫人、フランス国務長官・大臣 セバスチャン・レコルヌ氏、在仏日本大使館・特命全権大使 木寺昌人氏、ウール県知事 ティエリー・クデール氏、モネ財団理事長 ウッグ・ガル氏、平松礼二氏
［下右］木寺夫妻、フレデリック・フランク氏（ジヴェルニー印象派美術館館長）から花束を贈呈される平松氏
［下左］平松展会場を訪れた河野太郎外務大臣

郎外務大臣らが相次ぎ来館、という事実も同展の位置づけとかかる期待の大きさを物語る。

展覧会場へと目を向ければ、地上1階で〈ジャポニスム――印象派〉展を、そして地階一室が〈平松礼二 in ジヴェルニー〉展という2部構成。前者がモネ、ボナール、ゴッホらがジャポニスムの影響のもとに描いた逸品の数々と、その起点となった北斎などの浮世絵の数々を展示。後者はジヴェルニー印象派美術館の平松コレクションからモネの影響が顕著な絵画6点、屏風2点を厳選、公開。印象派の巨匠たちがこぞって描いた日本様式の絵画表現と、モネ《睡蓮》にインスパイアされた現代日本画家が展開する煌びやかな《睡蓮》との対比が何とも興味深い。

そんなことも手伝ってか、館内は平日にもかかわらず多くの来場者で賑わい、平松展会場でも出品作を熱心に見つめる人々の姿が印象に残った。言い換えれば彼らにとっての印象派は見慣れたスタンダード、かたや平松芸術は大多数にとって初めての日本画体験。それだけに作品へと向けられた関心と興味は同朋の私たちの想像をはるかに上回ると言っていいかも知れない。

《ジヴェルニー モネの池 微風》 六曲一双屏風（右隻） 2013年

現代日本画に注がれる関心の高まり

その後、午後4時からは木寺大使の挨拶の後、ヴァネッサ・ルコント（ジヴェルニー印象派美術館・学芸担当）、平松礼二2氏による対談（88〜91ページに掲載）がスタート。大多数の聴衆の思いを代弁するかのような質疑応答が飛び交い、同館が所有するまでに至った〝ジャポニスム・シリーズ〟の魅力と評価、さらなる発展の可能性が多様な視点から語られた。また、会場を移し開催された祝賀会には木寺大使夫妻らも参列。アコーディオン演奏も入り終始打ち解けた雰囲気の中、最後は平松さんの音頭でフランス国歌を合唱、フィナーレとなった。

6時間に及んだ式典を終えた帰りの車中、ふと思ったのは、前回、そして今回と、ジヴェルニー印象派美術館での2度にわたる平松礼二展が、画家にとっては国際的評価を得るための試金石であったという事実。2013年の来場者が7万4000人、今回もさらなる入場者数が見込まれるという現地関係者の声。さらに美術館が作品をコレクションしたという評価実績があれば、欧米のコレクターも黙って見過ごすことはないだろう。そんな気運の高まりは画家の市場評価にも着実に反映されている。2014年まで号＝40万円で推移していた作品の発表価格は、15年以降号＝50万円と右肩上がりだ。

同行メンバーの一人、成川實さん（箱根芦ノ湖 成川美術館館長）の「日本画の伝統を継承し、異文化との交流の中で創造された平松芸術が〝世界画〟として認められようとしている」という言葉を思い出しながら、国際画家という形容がもはや誇張ではないことを改めて実感した一日だった。

（F）

平松礼二 in ジヴェルニー

会期　開催中〜 2018 年 11 月 4 日
会場　ジヴェルニー印象派美術館

平松礼二作品、展覧会情報等の問合せ先
〒171-0021
東京都豊島区西池袋 2-36-1-510
平松礼二展実行委員会（S&D 内）
Tel: 03-5992-2002
Fax：03-5396-5500
Mail：doi-sd@chive.ocn.ne.jp

1809_hiramatsu3.indd 84-85
2018/08/06 13:14

平松礼二 in ジヴェルニー

［随行記］

ジャポニスムの新たな展開の予感

池谷若菜

シヴェルニー印象派美術館から徒歩10分ほどの距離にあるモネの家と庭園

私の所属する町立湯河原美術館には、平松先生の作品を常設展示する〈平松礼二館〉があります。先生との関わりは、２００２年に当館（当時は湯河原ゆかりの美術館）で開催された特別展〈日本画・革新への潮流―平松礼二展〉がきっかけでした。この展覧会の企画を持ちかけた数年前、平松先生はオランジュリー美術館の《睡蓮》（クロード・モネ作）に触発され、印象派の研究のためジヴェルニー村やノルマンディ地方を繰り返し取材し、１９９９年にその成果を〈印象派　ジャポニスムへの旅〉として発表されていました。

先生によると、それまで湯河原はなかなか訪れる機会がなかったというお話でした。当時文藝春秋の表紙絵を担当（２０００年～２０１０年）されていた平松先生との親交が始まり、２００６年に〈平松礼二館〉が開館。現在、平松先生には当館の名誉館長にご就任いただいています。

そしてこのほど、フランスのパリ郊外にあるジヴェルニー印象派美術館で開催されている展覧会〈平松礼二 in ジヴェルニー〉と平松礼二先生の講演会に参加する機会をいただき、ジヴェルニー村のモネの家や庭、そして印象派美術館を訪ねました。

日仏双方の架け橋へ

モネの庭園の目と鼻の先にあるジヴェルニー印象派美術館は、２００９年にリニューアルオープンした公立美術館で、オルセー美術館の協力のもとモネや印象派に関連した作品を展示しています。今年は日仏交流１６０周年の年にあたり、記念事業の一環として〈ジャポニスムと印象派〉展（7月15日まで）を開催。日本にも馴染みの深いボナール、マネ、ゴッホ等をはじめ、多くの画家が日本文化に影響を受けて描いた作品や葛飾北斎、喜多川歌麿などの浮世絵版画が展示され、さらにジャポニスムの流れを汲む現代作家として「平松礼二展 in ジヴェルニー」展が同時開催という運びとなったのです。

今回の展示は、２０１３年に同館で開催された〈平松礼二・睡蓮の池・モネへのオマージュ〉展の後、新たに収蔵された2点の屏風作品を含む計8点の作品が出品されていました。いずれも〝モネの睡蓮〟をモチーフに、日本の四季を織り込んだ平松独自の世界観を持った作品です。ハイライト作品の一つ《モネの池に夕の雲映る》（六曲一隻屏風）では、燃えるような夕映えの池面にリズミカルに散らした雲の表現に、常に「遊びごころ」を持って新しい画境を切り開いていく画家の意欲を感じました。

《モネの池に夕の雲映る》
六曲一隻屏風
2013年

夕方より行われた講演会では、友の会会員や日本からの招待者など約１００人が会場に集まる中、レコルヌ仏国務長官の挨拶に続いて、木寺在仏日本大使館特命全権大使の挨拶があり、国をあげての事業であること、現代日本美術を代表する作家として平松先生の評価が不動のものとなっていることを改めて感じました。

講演会は日本語・フランス語同時通訳により、学芸担当のヴァネッサ・ルコント氏と平松先生によるインタビュー形式で行われました。「平松さんとモネの共通点は？」「新たなシリーズの構想は？」という質問に対し、「装飾的な発想」、「さらに装飾性を高めたい」と平松先生は答えており、日本の伝統美の特色である「装飾性」をさらに追求していく姿勢がうかがえました。また、スクリーンに制作中の動画を映して日本画の技法を紹介する場面では（展示室にも日本画の画材の展示がありました）、フランス人だけでなく日本人の聴講者も興味深く熱心に見入っている姿が印象的でした。平松作品が日本とフランスの架け橋となり、今後作品を通じて様々な角度から日本画や日本文化の研究がされていくことが期待されます。講演会の最後に平松先生から発せられた「熱意がある限り日本とジヴェルニーをつないでいく」という力強いメッセージに、ジャポニスムの新たな展開の予感がするのです。

（町立湯河原美術館）

〈ジャポニスム――印象派〉展と〈平松礼二 in ジヴェルニー〉展を紹介するジヴェルニー印象派美術館のリーフレット［上］。
平松展を特集紹介した『アートオブジェクト』誌表紙とインタビュー誌面［下］

1809_hiramatsu.indd 86-87　2018/08/06 13:14

美術館地階のホールで行われた対談風景。多くの来場者が熱心に耳を傾けた

平松礼二
（日本画家）

［対談］＋

ヴァネッサ・ルコント
（ジヴェルニー印象派美術館・学芸担当）

昨日・今日・明日―ジャポニスム・シリーズ 25年の軌跡

モネ《睡蓮》との出会いと衝撃

ヴァネッサ・ルコント（以下・ルコント）　このたびは平松さんをここにお迎え出来て光栄です。今回の対談をとても楽しみにしていました。まず、はじめに、あなたは小さい頃から絵をはじめたと伺っていますが、早くから画家を「生涯の仕事」と決めておられたのですか。

平松礼二（以下・平松）　小さい時から絵がとても好きで、目の前にあるもの全てをスケッチブックにデッサンしていました。ただ、いつの時点でずっと絵を描いていこうと決心したかは定かではありません。おそらく小学校4年生頃だったと思います。

ルコント　日本画の他、油絵、彫刻も学んだということですが、なぜ日本画を選ばれたのですか。

平松　日本が戦争に負けて欧米から一度にたくさんの文化が押し寄せてきました。それは当時の日本文化を拭い去ってしまうかのようでした。でも目を澄まして見ると目の前に素晴らしい日本文化がたくさんあると思ったのです。美術学校の大抵の学生は彫刻とか洋画に向かいましたが、私は今目の前にある日本文化を引き継いでいこうと決心し、日本画に進みました。

ルコント　青春時代、どのような作品に影響を受けましたか。

平松　特別関心を持った作品はなかったのですが、長い歴史を経てきた北斎の版画とか広重の風景画などに惹かれていました。

ルコント　1994年にオランジュリーのモネの傑作、壁画を前にして、大きな衝撃を受けられたのでしたね。モネとの出会いはそれがはじめてだったのでしょうか。

平松　長い間日本がアジアの中でどんな位置にあるのか、日本とは一体どれほどの芸術的価値を持った国なのかいつも考えていました。ですから50歳になるまで、西洋の方にあわてて行く必要性を感じませんでした。まず、自分の目の前にある日本と東洋、アジアの文化芸術をきわめてみたかったのです。ところが、50歳になったある時、スポンサーからパリで個展をやってみないかと誘われました。随分遅れてのパリです。オープニングの翌日、公園に散歩に出たのですが、そこでオランジュリー美術館の前に立った。何の知識もなく入ると衝撃を受けて立ちすくんで動けなくなりました。なぜならほとんどの西洋画はパースペクティブ、遠近感をはっきり表現する。でもモネの描いた睡蓮は遠近感に乏しく、近景が克明に描かれている。これは東洋の技法に似ている、それで憑りつかれてしまいました。

オランジュリー美術館のモネの大壁画《睡蓮》。
写真：田島正/アフロ

類を見ないデザイン力への共鳴

ルコント　オランジュリーでの経験の後、ジヴェルニーのモネの邸と庭を訪問することを決心されました。その時の思いはどのようなものだったのですか。

平松　この作品が生まれた故郷を訪ねることが、私の心の中の迷いや光を見出すことになると思いました。池の周り、庭の周りを何回も歩きまわりながら、写生をし、どうしてこれほど日本画家である自分の心を捉えて離さないのか、それを自分で研究したい気持ちが強くなりました。

ルコント　モネの後半の作品が平松作品に大きな影響を及ぼしたとありますが、モネの作品はあなたの仕事にどのようなインスピレーションを与えたのでしょう。また、それはあなたの作品をどのように成長、変化させましたか。

平松　一番の驚きはこれまで見たことがなかったような明快なデザイン。油絵で見たことがなかった点描のような光の輝き。それが一番の衝撃でした。それを見ながら私の絵画のスケール感を出そうと思いました。西洋画は絵具を一色一色あるいは何色も混ぜ合わせて発色します。日本画は一色を何回も何回も塗り重ねて差異を生み出す。画材は一色でも15とおりの粒子の粗さがあって、当然、色は混ざりませんし、混ぜれば濁ります。だから出来るだけ一色一色を塗り重ね最終的に希望する色を表現します。モネの色彩がまさにそうで感激しました。

ルコント　20年前から平松作品にとって、水面に投影する景色は重要な要素となっています。そのことについてご説明いただけますか。

平松　少し外れるかもしれませんが、日本の中世の絵画には鏡に映るモチーフが多く描かれています。特に浮世絵では鏡を持った女性が自分を映している様を描いています。映すことに関心が強い民族、習性なのかもしれません。ですからモネが水に映った雲や周囲の木々や花々をキャンバスに映しとる、その繰り返しの行為がとても興味深く、私もそれを実験したいと思いました。

ルコント　1907、1908年にモネが使った丸い絵のフォーマットをご自身の作品でも用いています。何か思うところがあったのでしょうか。

平松　といいますか、日本人の歴史の中には随分前から存在していまして、例えば建築の窓など四角いものを丸くしたり、半円形にしたり、三角形にしたりして楽しむ習性があります。日本画もまたしかり、ですからモネの丸いキャンバスを見た時、特に驚いたりはしませんでした。

ルコント　モネはあの時代に遠近法不在の作品を制作する大胆さ、また、高齢にもかかわらず、あの大きなスケールの作品にチャレンジしました。その取組みはあなたの作品にも見られます。二人の作品の共通点は何で

1809_hiramatsu3.indd 88-89
2018/08/06 13:14

しょう。

平松　共通点というのは、一つは貪欲に自分の絵のスタイルを作っていこうというデザイン力だと思います。モネが池に睡蓮を浮かべてそれを映したり、鉢に植えて水面に出たところが非常に装飾的なデザインになるということを発想して絵画にした。他に類を見ないような創造的なデザイン、それに対して私も大変共鳴します。

ルコント　1966年以来、作品は常にシリーズとして発表されていますね。

ジャポニスム運動の起点になった葛飾北斎　《冨嶽三十六景 凱風快晴》
天保2年（1831年）頃 すみだ北斎美術館蔵

平松　おおまかに描き始めた10代の頃から、大体5年間勉強して次のシリーズ、つまり5年を一つのスパンにテーマを決めて勉強してきました。ですからシリーズで連作というのはたくさんあります。が、一番多いのはモネのジャポニスムの心の中を探ろうという連作ということになります。

ルコント　過去25年間、何度もジヴェルニーを訪れ、四季折々の庭を歩き回りたくさんのスケッチをされています。いつも絵の仕事に取りかかる前にデッサンされるのでしょうか。また、デッサンの時点でどの色を使うか決めるのでしょうか。

平松　スケッチをする時、必ずこういうタブローを描きたいということを連想しています。訓練のためのデッサンではなく、制作するためのデッサン。技術を高めるより、いろんな思考を重ねることで自分の中の新しい発明や発見を重ねることが一番重要です。また、ジヴェルニーに長い間来ているのは、限りなく魅力ある場所だから。モネを中心に様々な印象派の画家たちが同地を訪れ、実験制作して現在に残しています。それからも分かるように限りない魅力を持った場所だと思います。

装飾の中にも静けさのある空間を

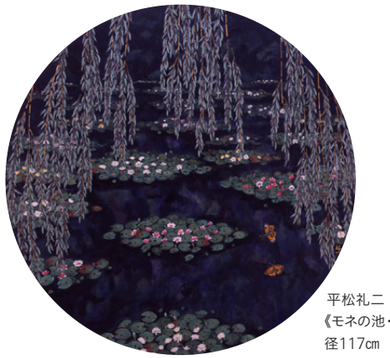
—NHKで放映されたドキュメンタリー番組（2013年）を見ながら—

ルコント　過去のインタビューの中で、あなたは睡蓮の装飾的な要素にも惹かれたと語っておられます。それを踏まえて、《ジヴェルニー モネの池・風音 2013》の制作についてお聞かせください。

平松　西洋絵画の中で装飾はあまりはっきりと表れていません。モネは自分が描こうとした水の上の睡蓮そのものが装飾だと解釈した。睡蓮を鉢植し一株ごとに咲かせると、女性の首飾りやイヤリングなどにも似た大きな飾り物になる。これを実験したのか想像したのか定かではありませんが、いずれにせよモネは睡蓮を描くことで完全なる装飾を表現できたと思います。そこから私はヒントを得て自分なりに装飾性を活かすように、今度はモネに私が答えを返すようなかたちで、モネの睡蓮をもっと装飾的にする。池に映っている雲を金色にしたらどうだろう。雲全体を金に染めてしまってモネの装飾性を強くしたらどうだろうか。この作品で私がモネに返した答えです。装飾は絵画をより美しく、より強くしていくことに違いありません。ただ装飾の中にも一つの余白、静けさというか、描いてあっても描いてないような不思議な宇宙観も必要ではないか。綿密に空間を埋めてしまって装飾を強くするだけでなく、どっかでフッと抜けるような作品を描いてみたかった。ということでこの作品は白い桜の花びらだけで埋めるという、ほっとする弱い空間を描いてみました。

ルコント　2002年、あなたははじめてオランジュリーで睡蓮の絵に出会った感想を次のように述べています。「クロード・モネの睡蓮の超大作のシリーズを見て愕然とした。一年発起して《印象派・ジャポニスムの旅》という日本画家の目による〝ジャポニスム研究〟をはじめた。究極の目的はジヴェルニーにあるモネの庭園で〝ジャポニスム〟を探求すること。少年時代から日本の美への憧れを抱き続けたクロード・モネ、彼が〝ジャポニスム〟になぜそこまで惹かれたのかを理解したい、そしてクロード・モネの目というものを探りたい」と。ではあなた自身はジャポニスムをどのように定義されますか。

平松　それはとても難しい質問ですね。画家は一人一人、自分の物の見方によってどういう表現をするか、各々異なります。画家というのは自分一人が一つの個性でありたいと常々考える。ですからただ日本の絵画に興味があってといっても、絶対自分でしか生み出せないようなモチーフを確立しなくてはいけない。たくさんの人が日本の浮世絵から創作のヒントを得ましたが、モネは自分自身で新しい装飾、様式性、遊び心などを見出した。その最大のモチーフが睡蓮だったのではないでしょうか。生きた睡蓮が様々なかたちに変化して、絵画だけでなくもっと大きな宇宙を生み出している感じがします。



平松礼二
《モネの池・緑陰》
径117㎝　2011年

ルコント　以前あなたが一番影響を受けた画家として北斎の名が挙がりました。その理由についてお話しいただけますか。

平松　例えば有名な富士の絵《凱風快晴》があります。山を描くだけでどれだけ大きな宇宙観を感じさせるか。手前にはほとんど何も描いておらず、あるのは空の白い雲だけです。3700メートルを超える大きな山を小さな画面の中でうんと右に寄せてしまって、雲と手前の空間の表現だけで魅了する。このスケール感は現代的にいうと大変大きな設計力を持っている、まさに構図の魅力。画家の最大の武器が如何なく発揮されています。同様に《神奈川沖浪裏》も遠くに富士を描いていますが、波をこれだけ大きく描き波頭の先のディテールまで細かく描きこんで全体を躍動感あるデザインにしています。これも設計力に満ちた絵画。これほど大きな世界を小さな画面に描いた作家はいませんでした。

熱意が続く限り描き続ける

ルコント　印象派の巨匠の足跡をたどってルーアンやオンフルール、エトルタ、フェカン、ドーヴィル、トローヴィルを訪れています。旅の目的は何だったのでしょう。

平松　はじめてパリに足を運んで以来24年間、ひたすらセーヌ川を上ったり下ったりしながら思ったのは、日本の浮世絵をきっかけにして自分たちの心の中の絵を美術運動にしようとした印象派の画家たちがいたという事実。ジャポニスムといったものの発生を当時のモネだけの心の中から探り出すのではなく、たくさんの画家たちの心の中から探り出して、私の画家人生の中の大きな研究にしたかった。それには画家が活動した所、描いた所など、現場に立たなくては出来ないと思いました。

ルコント　2013年に画家ウジェーヌ・ブーダンについて触れていますがそれは何故でしょう。また他にどんな画家と向き合いたいと思っていますか。

平松　以前、フランスの学芸員の方からモネの次に何を勉強するのかと聞かれ、思わずブーダン、それからボナールと答えました。その時の心境はオランジュリーにあるモネの睡蓮の連作を見て、ブーダンの描くノルマンディーの雲があの睡蓮をぐるりと取り巻いたらどんな画面が出来上がるのだろう、そう思ったからです。もう一人ボナールはセーヌ周辺をあの独特な色彩で描いている。25年前のオランジュリーの睡蓮同様、セーヌ川周辺の自然が織りなす色彩のドラマを80メートルを超える大画面にしたらどうなるんだろうと思いました。

ルコント　最後の質問です。あなたはこれから先いつまで制作を続けるのでしょう。

平松　画家が絵をやめる時というのは、肉体も心も錘をつける時。これから先、何年描けるかは分かりませんが、やはり関心、興味、熱意、そういったものがある限り描いていきたいです。そして、その対象はやはりジヴェルニーと印象派と日本をつなげるものでありたいと思っています。

ルコント　本日は有難うございました。

（※2018年6月15日収録、文責・編集部）

1809_hiramatsu3.indd 90-91
2018/08/06 13:14